

国立国語研究所学術情報リポジトリ

宮古群島若年層による方言音声認識の実態： 老人と若者の間

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 由美, 徳永, 晶子, 諸岡, 大悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002465

宮古群島若年層による方言音声認識の実態 —老人と若者の間—

中島 由美・徳永 晶子・諸岡 大悟

1. はじめに

宮古群島域に多く聞かれる特徴的な音声については、これまでにさまざまな報告、分析が行われてきた。なかでも注目されてきたのは、本土方言の *i に対応するものとして、舌端部が歯茎に接近することにより著しい摩擦噪音を伴う母音が聞かれることであろう。これを音声学的にどう定義すべきか、あるいは音韻論的にどう記述すべきかなどの問題提起や、さらに実験音声学的分析を活用した取り組みなども行われている。そうした中で、本プロジェクトによる今回の調査（以下「本調査」とする）によって、統一的調査票によりある程度まとまった音声データが新たに得られ、宮古方言の全容を視野に入れた分析が容易になったことから、これまで我々が実施してきた若年層の言語行動調査に本データを活用することを計画した。いまだ実験的な試みに過ぎず、方法等検討すべきことは多いが、消滅危機方言の保存・継承に向けて若年層の方言音声認識の実態が少しでも捉えられればと考えている。

一橋大学社会学部中島ゼミナールでは、2008年より宮古島・伊良部島を対象として継続的に言語生活実態調査を行ってきた。比較対象のため一部老年層も含めているが、主として高校生を中心とする若年層を対象としている。アンケート調査や聞き取り調査を組み合わせて工夫を重ねてきたが、若年層が、本土は勿論のこと沖縄本島とも異なる音声特徴をどのように認識しているのかについては、常に関心を持ちながらもなかなか取り組む方法が定まらなかった。

そこで、本調査のデータを活用した実験的試みとして、まず手始めに2011年11月に、小規模ながら聞き取り用の項目をアンケート調査の中に含め、方向性を探ることにした。さらにその結果を受けて、音声聞き取りに特化して規模を少し拡大した調査を2012年3月に実施した。ここでは現時点までに得られた結果について報告し、今後の方向を検討するための材料としたい。

2. 調査の概要

- A. 若年層による宮古島方言音声聞き取りの実態調査 1
- B. 若年層による宮古島方言音声聞き取りの実態調査 2

2.1 調査1は2011年11月に、宮古島市における県立高校2校の協力を得て行った、高校生の言語生活実態調査の一部である。調査はアンケート調査と面接調査を組み合わせたものであるが、このうちのアンケート調査の中に本調査で得られた音声データから特徴的音声を含むものを5個選んで高校生に音声を聞いてもらい、1)どのような音として聞こえるか（カナ

で筆記するよう指定、片仮名 / 平仮名は自由)、2) 意味を知っているか、について筆記してもらった。また比較のため、2012年3月に沖縄本島中部の高校の協力を得て、同じ調査項目についてアンケート調査を実施した。各高校をここでは A 高校、B 高校 (以上宮古島市)、C 高校 (浦添市) とする¹。3 校併せて 130 名 (男子 79 名、女子 51 名) の回答が得られた。

調査 2 は、調査 1 の結果を踏まえ、規模を少し拡大して音声聞き取りに特化したもので、同じく本調査のデータより 50 項目を選び、2012 年 3 月に同じく宮古島市の高校で実施した。50 個の書き取りは通常のアンケート調査と違って生徒にもかなりの負担を強いいるものであるため、協力者は希望者を募る形で学校側に依頼したところ、17 名 (男子 2、女子 15) の協力を得ることができた。以上 2 つの調査の概要について次項で示す。

2.2 調査項目について

調査 1 では表 1 に示すような 4 個の語と 1 個の文データを用意した。選択のポイントは標準語音声との相違の目立つ特徴的音声、即ち、1) 摩擦噪音を伴う中舌母音、2) 子音 ([m] [l] など、以下簡略に成節的 m、同 l とする)、3) その他特徴的な子音 ([f], [v] など)、とした。音声データは本調査における音韻調査から、録音状態の良いもの、発音の明確なものなどを選んだ。1 個の文データも音韻項目調査の中で例文として得られたものである。なお、この段階では

音声の地域差については特に考慮していない。

表 1 調査 1 の聞き取り項目

項目	音源の地点名
1 頭	伊良部
2 肝	久貝
3 ミミズ	保良
4 握り飯	伊良部
5 子供が生まれる	与那覇

調査 2 では項目数を 50 に増やした。選択のポイントは調査 1 と基本的に同じであるが、本調査の結果から地域差が明らかであったものについては、音源の条件がよければなるべく特徴ごとのサンプルを選択するようにした。例えば *-ri に対応するものについて見ると、本調査の実施地点からだけでもほぼ 3 種類の変種が得られている。即ち、摩擦噪音の著しい久貝など宮古島南西部、母音的な狩俣や池間、成節的 1 が聞かれる伊良部島・国仲などである。そこで、こうした地域差が高校生の聞き取りにどのように反映されるのかを見るため、*-ri の含まれる項目「頭」については、久貝、国仲、伊良部 3 地点から音源を選んだ。地点によっては該当項目の回答が得られなかったものや、録音状態のため適当でないものもあり、まんべんなく音源を選ぶことはできなかった。このほか特徴的と思われる音声や、意味理解を確認するための語など、42 個の語項目を選択し、同じ意味の語、同じ地域等が続かないよう配列を工夫した。またこれらのほかに、本調査の文法項目調査で得られたデータから短文を 8 個追加した。これは語と文の間で方言の認識がどう変わるのがかを知るためにあるが、選択に際しては上記語項目選択のポイントと同じ音声特徴にも注目した。

1 調査にご協力いただいたのは、沖縄県立宮古高等学校、同伊良部高等学校の 2 校 (以上宮古島市) と、同浦添工業高等学校 (浦添市) の 3 校である。ご協力に対し心より感謝申し上げる。なお、調査 1 は一橋大学社会学部中島ゼミナールに所属する学部生 14 名、及び大学院生 1 名、鹿児島志學館大学学部生 3 名が分担して行った。調査 2 は、中島と本稿筆者 2 名の大学院生が分担して行った。

調査では音源を一斉に3回ずつ聞いてもらい、書き取ってもらうようにした。表記は仮名（調査1と同じく平仮名、片仮名どちらも可）とした。右の表2はことなり語ごとの語項目と選択した地点、表3は文項目と音源の地点を示したものである。なお、地域的異なりについて確認するために作成した分布図（図1～8）を参考に示す。

2.3 各音声特徴の扱いについて

このように調査2で地域による変種に注目したのは、それらの違いが高校生にとって聴覚印象上決して小さくないのではないかと考えたからである。似たような単語に出現する異なった音声に対して、彼らはどうのように反応するのか、変種ごとの処理を比較すれば、若年層の音声認識がより具体的に把握できるのではないかと期待したものである。変種の分類はあくまでもこのような目的に即したもので、宮古島地域の地理的分布全体に関する把握に基づいたものではない。元より本調査は分布調査を目的としたものではなく、調査者の記録も一定の方式で統一されてはいない。そこで分類に際しては調査者の記録を参考にしながら録音音声によって判断することにした。録音状態などによっては判定が難しい場合もあったが、最終的には我々の判断基準で統一したことをお断りしておく。²

2.4 調査対象者について

調査1

次ページの表4は、3校それぞれで調査した生徒の男女別内訳である。学年は1年と2年であるが、調査結果に目立った違いはなかったため、とくに分けていない。3校のうちA高

表2 調査2の語項目

	宮古島				伊良部島		地点数
	久貝	保良	宮国	来間	伊良部	国仲	
頭	○	—	—	—	○	○	3
肝	○	—	—	—	○	○	3
サトウキビ	○	○	—	—	○	—	3
息	○	—	—	○	—	—	2
稻光	○	○	—	—	—	—	2
お前	○	—	—	—	—	○	2
鎌	○	—	—	—	○	—	2
霧	○	○	—	—	—	—	2
こぶし	—	○	—	—	○	—	2
魚	○	—	—	—	○	—	2
人	○	—	—	—	○	—	2
みんな	○	—	—	—	○	—	2
姪	—	○	—	—	—	○	2
油味噌	—	○	—	—	—	—	1
蟻	—	—	—	—	—	○	1
海	—	○	—	—	—	—	1
鏡	—	—	—	—	○	—	1
口	—	—	—	—	—	○	1
クワズイモ	—	○	—	—	—	—	1
子	○	—	—	—	—	—	1
誰も	—	—	○	—	—	—	1
月	○	—	—	—	—	—	1
東	○	—	—	—	—	—	1
昼間	○	—	—	—	—	—	1
みんなで	—	—	○	—	—	—	1
老人	○	—	—	—	—	—	1
語項目数	16	8	2	1	9	6	42

表3 調査2の文項目

	文	音源
1	子供が生まれる	伊良部
2	海に行った	来間
3	ゴキブリはなかなか死ない	保良
4	高校生は制服を着る	保良
5	昨日は校長先生が座った	保良
6	茶はさっき飲んだ	砂川
7	昨日はいとこと遊んだ	砂川
8	昨日も海に行った	保良

² インフォーマントが最初は摩擦音を強く発音しながら、調査者が聞き直した際に改めてゆっくり言おうとして母音になっているような場合もあった。インフォーマントの音認識とどうつながるか興味深い問題ではあるが、このような場合には併用とした。母音についても、前より、奥より等さまざまであるが、ここではひとくくりにしている。

校は男女にあまり差がないが、B高校、C高校では女子比率が低くなっている。表5、表6は宮古島市2校の生徒の出身地と現居住地の内訳である。県外出身者が宮古4、伊良部5、計9名に上っているが、集計からは除外していない。C高校については別途表7、表8に示した。

調査2

調査に協力してくれた高校生は上述の通り計17名（1年生3名、2年生14名）、男女内訳は女子15名、男子2名である。出身地は宮古島島内14名（伊良部島出身者はなし）、沖縄県外が3名（鹿児島、愛知、東京）である。現在の居住地は全員が宮古島島内で、うち平良地区（下里、西里、東仲宗根などを含む）が12名を占め、残りは久貝2名、砂川1名、城辺1名、不明1名である。島外居住経験者のうち12名が宮古島居住年数16年以上だが、残りの5名の中には5年以下という者も2名いた。通常のクラスを対象とした調査でも、このように生え抜きと見なせる生徒のみでない状況は同じであることから、敢えて調査対象を区別しないことにした。両親についてはともに宮古島島内出身であるものが11名、どちらか一方が宮古島出身が4名、両親ともに宮古島以外の出身であるのは2名であった。

表4 調査対象の高校生・男女別内訳

男女	A高校	B高校	C高校	計
男子	20	21	38	79
女子	27	9	15	51
計	47	30	53	130

表5 出身地（A高校・B高校）

	A高校	B高校	計
宮古群島内	41	23	64
沖縄県内	2	2	4
県外	4	5	9
計	47	30	77

表6 現在の居住地（A高校・B高校）

	A高校	B高校	計
平良	36	1	37
城辺	4	0	4
上野	3	0	3
下地	2	0	2
佐良浜	0	13	13
伊良部	0	10	10
不明	2	6	8
計	47	30	77

表7 出身地（C高校）

地域区分	
浦添・宜野湾	35
他の本島中北部	6
本島南部	7
本島外県内	1
沖縄県外	3
不明	1
計	53

表8 現在の居住地（C高校）

地域区分	
浦添・宜野湾	38
他の本島中北部	5
本島南部	9
計	53

3. 調査結果

3.1 調査1の音声聞き取りと意味理解

3.1.1 「頭」

「頭」の音源は伊良部島・伊良部のもの（本調査記録では *k^hanamaŋ*）である。同じ伊良部島のもう一カ所の調査地点国仲では語末の成節的1が明確であるが、それに比べて母音的であり、しかし宮古島・狩俣などと比べると側音に近いようでもあり、中間的発音に聞こえる。

回答のあった121名のうち、語頭に「カ」³以外を選んだのは12名のみで（表9）、残りは全員「カ」で始めており、さらにその半数以上が「カナマ」まで音源に一致する。そこでまずこの「カナマ」まで一致する回答について、その次にどのような表記が選ばれているかを見てみた（表10）。最も多いのは母音で、成節的1を反映したかと思われる「ル」は全体でも5名に過ぎない。母音の中では「イ」が最も多く、次いで「ウ」となっている⁴。興味深いことに、老年層では国仲のように明確な成節的1も聞かれる伊良部島に居住するB高校の生徒が、ひとりも「ル」を選んでいない。可能性としては方言音声として耳慣れているためにかえってわざわざ表記しなかったのかもしれないが、勿論推測の域を出ない。

表9 語頭がカ以外のもの

	タ	ハ	
A高校	1	1	
B高校	1	4	
C高校	5	—	
計	7	5	

表10 「カナマ」の後に何を書いたか

カナマ+	イ	ウ	エ	ズ	ル	ア/一	ヌ	ン	なし	
A高校	6	5	1	3	3	—	2	3	2	
B高校	22	3	—	—	—	2	—	—	—	
C高校	—	—	1	—	2	1	—	2	1	
計	29	8	2	3	5	3	2	5	3	

次に「カナ」までが元の音形に一致する回答を見ると、ここでは「ン」が最も多くなっている（表11）。全体的に「カナマ」まで聞き取れている生徒に比べると、語末の認識が不安定である。またA高校で「かなむん」（5名）、C高校で「かなわん」（6名）がそれぞれ複数回答されているところを見ると、「カナ」の後の判断に困った生徒はわかりやすい形に理由づける心理が働いたのかもしれない。

表11 「カナ X」の後に何を書いたか
(Xは任意の1、もしくは2文字)

カナ X+	ン	イ	エ	リ	ア	
A高校	6	3	2	2	1	
B高校	—	1	—	—	—	
C高校	15	—	1	—	1	
計	21	4	3	2	2	32

表12 「カナ」まで音源に一致した回答例

カナムアイ	カナウマン
カナムイ	かなむあん
かなもい	カナムアン
かなんまい	カナムウン
カナゴエ	カナムン
カナゴエ	かなむん
カナモエ	カナモエン
かなんまり	カナワン
かなうあん	かなわん

以上方言形に近い回答から見てみたが、これら以外にも多くの形が得られ、「カラマル」や「ツナマヨ」といったものまである。ちなみに全体的に意味理解が低い中で、「頭」は5項目中最も高い意味理解度を示しているが（次ページの表13）、実際の形と意味が連動しているとは言えないようである（同表14）。

³ 上に述べたように回答は平仮名、片仮名どちらも使われているが、ひとつの項目について両者を混ぜて表記したものはなかったので、ここでは片仮名に統一して示す。

⁴ 老年層でも一度成節的1もしくは摩擦噪音を伴う発音をした後に、ゆっくり言い直す際にイが選ばれるのを体験することがあるが、それとの関係は不明である。

表 13 「頭」の意味

	「頭」との回答
A 高校	5
B 高校	9
C 高校	—
計	14

表 14 意味理解と形の関係（正解者の表記）

「頭」	カナマイ	カナムアイ	カナマウ / ウ	カナマル	カナム
A 高校	2	—	1	1	1
B 高校	5	1	3	—	—

3.1.2 「肝」

「肝」には摩擦噪音の強い宮古島・久貝の音源を用いた（調査記録では *k^simu*）。このようなはっきりした摩擦噪音はどのように聞き取られたのだろうか。無回答であったものを除くと、語頭にはすべて「ク」が選択されている。そこでこの「ク」の後に「ス、ツ」などが書かれていれば、摩擦噪音を反映した可能性が高いと判定した。そのように見た場合、沖縄本島の生徒のほうがよりその部分に反応していることになる。宮古島地域の生徒は先の「頭」の場合と同様、意味のわかる単語としての地位は危ういが方言音声としての認識は持っていて、「地域的な音」、もしくは「自然な音」と受け取っているのかもしれない。なお、摩擦噪音を反映すると思われる表記は、表 16 のように「ス」が圧倒的に多かった。

表 15 「肝」：語頭のクの後にス、ツなどがあるか

	あり	なし	計
A 高校	9	38	47
B 高校	—	29	29
C 高校	20	25	45
計	29	92	121

表 16 「肝」：クの後の摩擦噪音の反映と見られる表記

	ス	セ	ツ	計
A 高校	9	—	—	9
B 高校	—	—	—	0
C 高校	18	1	1	20
計	29	1	1	31

次に、摩擦噪音の反映と思われる要素のあるもの / ないものそれぞれについて、全体がどのような構造になっているかを見てみる。最も多いのが「ク」の後に「ヌ、ン、ム」を書いた 2 文字型の回答（75 名）であるが、そのうち語末の鼻音が「ム」など M⁵ のものはわずか 6 名で、3 校ともに「ヌ」や「ン」が多く選ばれている。即ち、語末の -m についての認識が

表 18 摩擦噪音の反映とみられる要素のあるもの

	3 文字型	その他				計		
		未鼻音	計	KNSC	KSNv *	KSNN	NKSN	
A 高校	N	6	—	—	—	—	1	7
	M	—	—	—	—	—	—	0
B 高校	N	—	1	—	—	—	1	
	M	0	—	—	—	—	0	
C 高校	N	10	—	—	—	—	10	
	M	8	1	1	1	—	11	
計		24	1	1	1	0	27	
	例	クスム くすん クセム クスミ	くすむっ クスモア クスムン ンクスヌ					

表 17 摩擦噪音の反映とみられる要素のないもの

	2 文字型	その他			計		
		未鼻音	計	KNC	KNN	KvN	
A 高校	N	28	5	3	2	38	
	M	2	—	—	—	2	
B 高校	N	24	3	—	0	27	
	M	0	—	—	—	0	
C 高校	N	17	3	—	—	20	
	M	4	1	—	—	5	
計		75	12	3	2	92	
	例	くぬ くん クム クム	くぬつ くんつ クモッ	クヌン	くうぬ		

(* v は母音として、大まかにまとめたものである。子音と区別するため小文字で示す)

5 語末の鼻音について細かい違いをまとめ、ヌ、ンなどを N、ムや小さく書かれたムなどを M のように大文字で大まかに示す。

低いか、もしくは方言音声として知ってはいても表記にはN系を選んでいるのかもしれない。一方摩擦噪音の反映とみられる要素のあるもの27回答のうち最も多いのは3文字型の24名であるが、こちらは語末の鼻音がNのもの16、Mのもの8と、Mを表記したものの割合が2文字型よりわずかだが高くなる。サンプルとしては非常に少ないが、摩擦噪音を特異な音として聞き取った者のほうが、語末の-mにより反応した可能性もある。「頭」の場合と同じくC高校でより多く得られているので、共通の傾向があると言えるかもしれない。

ちなみに、「肝」はさまざまなフレーズにも登場し、比較的若年層にも馴染みのある語ではないかと予測していたが、意味についての言及は2回答のみで、「このふたり」「きのう」という結果であった。

3.1.3 「ミミズ」

使用した音源は保良で得られたものである（記録では *mimdz*）。宮古方言には m: (イモ) のように成節的 m が活発に表れるので、これがどのように知覚されているのかを見たいと考えた。方言音声としては比較的単純な構造で聞きやすいのではないかとの予測に反して、回答はなかなかヴァラエティに富んでいる。無回答のもの（A高校1、C高校5）を除く総回答のうち96名が語頭に「ミ」を選んでいるが、「ニ」も27名あった。ただしこれら以外のものも、「びんず」1例を除いて「みゅんず」「ネンムズ」のように鼻音を用いている。また語末には「ツ」の2例を除きすべてで「ズ」が使われている。このように「ミ / ニ_ズ」という構造が大勢を占めるので、この中で元の成節的 m の位置にどのような文字が挿入されているかを見てみる。「ミ」で始まるもの、「ニ」で始まるものそれぞれ別にまとめたものが表19、表20である。いずれも「ン」が圧倒的に多く、成節的 m を反映したとみられる「ム」はわずかである。しかもここでも敢えて選んだのは沖縄本島の高校生のほうが多い。摩擦噪音を伴う中舌母音に比べて成節的子音 m, l などは、それ自体は外国語の音にも慣れている現

表19 語頭が「ニ」で始まるもの

語中はどんな形をしているか					
	ン	ンッ	ンム	ム	計
A高校	8	1	1	1	11
B高校	—	—	—	—	0
C高校	9	—	5	2	16
計	17	1	6	3	27
例	ニンズ	にんつず	ニンムズ	ニムズ	

表20 語頭が「ミ」で始まるもの

語中はどんな形をしているか										
	ン	ンッ	ンム	ウン	ム	ミ	ニ	ンムン	なし	計
A高校	32	—	2	1	—	1	—	—	—	36
B高校	28	1	—	—	—	—	—	—	—	29
C高校	18	—	1	—	3	4	1	1	2	30
計	78	1	3	1	3	5	1	1	2	95
例	ミンズ	ミンッズ	ミンムズ	みうんず	ミムズ	ミミズ	ミニズ	ミエンムンズ		

代の若年層にさほど違和感がないのではないかと思われるのだが、方言音声と連動して認識されているわけではないようだ。地域方言の特徴的な音声と言っても、既に標準語の音体系が基準になっている若年層にとっては、変わっているかもしれないが特別意識するようなものではないのかもしれない。

3.1.4 「握り飯」

「握り飯」は本調査語彙項目の米 / 飯のところで関連語彙としていくつかの地点で得られている。ここでは与那覇の音源を使用した（記録では *ma^zlnu^z*）。このような特異な音声に対して、高校生はどのように反応するのだろうか。結果は音声実態と大きくかけ離れた形や、無理に意味のあるものに関連付けようとしたらしいものなどが殆どで、表 21～23 が示すように「マジムン」（宮古地方で「化けもの」などの意）は 25 名あり、ほかにも「マイブーム」、「マヨネーズ」というようなものまであり、判断に困って理由づけをしたものようである。いずれにしても、理解度が低かったというほかに細かい分析は難しい。

表 21 「握り飯」 対応に困った結果の対処？

	マジムン	マヨネーズ	マイブーム	マングフ	ワームン	ワンヌ
A 高校	3	—	1	1	—	—
B 高校	21	—	—	—	—	—
C 高校	1	1	—	—	1	1
計	25	1	1	1	1	1

表 22 「握り飯」の意味は？

	おばけ	ゆうれい	ごはん	美味しい	私の趣味
A 高校	—	1	—	—	—
B 高校	11	3	1	1	1
C 高校	—	—	—	—	—

表 23 「握り飯」表記例

マイゲン	まいむ
マイブウ	まうぐー
まいぶ	マイヌ
マイブーム	マイヴン
マイフン	マジムン
マング	まぐ
まんぐ	まんず
まうぐー	まいみ
マイム	マイヌー
マングフ	らいぐ
マグン	まじむん
マグーウ	マイムン
マイム	まる

3.1.5 「子供が生まれる」

使用した音源は上と同じく音韻調査項目の中の例文として得られた与那覇のものである ([ffanudu mmari:] の助詞 nu の部分が -r- に近く聞こえる)。文を項目として加えてみたのは、文と単語とで音声聞き取りに差はあるのか、また意味理解度は異なるのか等について見るためである。

回答は語頭を「ファ」としたもの 44 名と「パ」としたもの 47 名に大きく分かれる。対応はともかく、宮古島地域の生徒にとっては「ファ」も「パ」も方言音声として馴染みのある音と思われ、近い音が聞こえたときに自然にどちらかが選ばれたものと推測される。これら「ファ」「パ」で始めたグループのそれぞれについて、元の音源で「子供が」に対応すると思われる前半部分を見ると、半分以上を FARD, PARD が占めている（表 24, 25）。最後の D に当たる部分は「ド」「ドン」「ドウ」などで、一定はしていないが元の音源の助詞部分を聞き取った結果と見られる。だとすれば両方のグループ併せて 52 名、全体の 4 割ほどの生徒は前半部分をおおよそ把握していることになる。この結果から、少なくとも音形上の問題として、

文が語より聞き取りにくいとは限らないと言えそうである。ただし、沖縄本島の生徒の場合には、「はなづまり」「たなのまわり」「バリどまり」、さらには「ファイトマネー」などといった回答が多くなり、彼らには「文が語より聞き取りにくいとは言えない」という傾向はどうやら当たらないようである。先の音声の聞き取りと逆の結果となっており、語の認識と文の認識の違いを示唆するものかもしれない。

表24 「子供が生まれる」：前半部分が「ファ」で始まるもの

	FARD	FARN	FARNT	FAID	FAIB	FAIT	FAIND	FANG	FARG/K	FANZ	計
A高校	11	1	1	—	1	—	—	—	4	1	19
B高校	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9
C高校	4	—	—	2	—	7	2	1	—	—	16
計	24	1	1	2	1	7	2	1	4	1	44

表25 「子供が生まれる」：前半部分が「パ」で始まるもの

	PARD	PANG	PAND	PARG	PARK	PART	PAFUN	BARD	HAND	HARB	HANZ	
A高校	18	—	—	2	2	—	1	—	—	—	—	23
B高校	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	3
C高校	9	3	5	—	—	1	—	1	1	—	1	21
計	28	3	5	2	2	1	1	1	1	2	1	47

(それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す)

3.1.6 調査1のまとめ

以上の結果についてまとめてみる。

- 1) わずか5個の調査であり簡単に結論づけることはできないが、琉球諸島の中で方言が比較的保持されているとされる宮古群島においても、若年層の方言音声理解力は決して高いとは言えない。使用頻度が高いと思われる語彙でも、形と意味とが関連付けられていないようである。
- 2) 宮古島市の高校生より沖縄本島の高校生のほうが、摩擦噪音などを表記しようと工夫した割合が高い。ひとつの可能性として、意味が全くわからないためかえって客観的に「音」として捉えようとしたのではないかとも考えられる。違和感の強い音であるほど、積極的に書き分ける必要を感じるのではないだろうか。宮古島市の高校生の場合、中～老年層の方言活用がまだ比較的活発であるため、方言音声に耳慣れてはおり、意味はよくわからず自分では音形を再現できないが、「変わった発音」という認識は持つていい、そのためかえって特別な発音とは認識せず、彼らなりに標準語的に再解釈してしまっているのかもしれない。
- 3) 宮古群島では特異な音声を表記するのに「宮古仮名」と言われる独特の表記が知られており、地元で編纂される辞典類や民謡の歌詞、方言によるキャンペーンなどで広く一般に活用されている。しかし宮古仮名方式の応用かと思われるものはわずかに「ゴ」が2例だけで、若年層に流布しているとは言い難いことがわかった。その一方で、彼らは自分なりにさまざまな工夫を凝らしている。母音や促音だけでなく、「ス」や「ン」などを小さく書くなどは、音の印象を再現しようと工夫したものであろう。

4) 単語よりも文のほうが聞き取りが難しいのではないかという予測に反して、単語を切り取って示すよりも、まとまったメッセージを文で示す方が反応が得やすいようだ。文のほうが、「何を言っているか」がわかりやすい、判断材料が多い、と捉えられている可能性がある。ただしこのことは宮古島市の高校生にのみ言えることで、単語で「変わった音声」に反応した沖縄本島の高校生が、文では対処に困ったのと対照的である。宮古島市の高校生が老年層の方言発話に耳慣れていることが背景にあると思われるが、語と文の認識の違いを示唆する可能性もある。

3.2 調査 2 の音声聞き取りと意味理解

調査 2 はサンプル数が 17 と少なく、計量的に分析することはできないが、生徒ひとりひとりがどのような対処を行っているかについてより細かく見ることができる。以下ではそうした視点から、いくつかの事例を取り上げる。

3.2.1 「頭」「東」「稻光」など： $*_{-ri}$ に対応する部分への反応

表 27 「頭」：3 地点・17 名の全表記

地点	久貝	国仲	伊良部
音形	$k^h anamazi$	kanama[$k^h anama]$
1	カナマズ	カナアマル	無回答
2	カナマヅ	カナマル	タナモエ
3	カナマズ	カナマル	カナマル
4	カナマズ	カナマル	カナマル
5	カナマズ	カナーマル	タナマス
6	カナマズ	カナマル	カナムル
7	カナマズル	カナアマル	カナンマ
8	カナマズ	カナマル	カナモエ
9	カナマツ	カナーマル	カナモア
10	カナマズ	カナーマル	カナム
11	カナマズ	カナマズ	タナグエ
12	カナンマズイリ	カナアマル	カナンムウ
13	カナマズ	カナマル	カナム
14	カナマズ	カナマズ	カナマズ
15	カナマツ	カナマズ	無回答
16	カナマズ	カナマル	カナムウ
17	カナマーズ	カナーマル	タマム

まず、 $*_{-ri}$ に対応する部分を含む語について見てみる。表 27 は「頭」（対応からは $*kanamari$ が推定される）について得られた全データである。久貝、国仲については全員元の音形にかなり近く表記しており、「カナマ」までほぼ一致している。それに対して伊良部については全体的にかなり回答がばらばらであり、無回答も 2 名ある。語末に注目してみると、3 つの変種によってはっきりとわかっている様子がわかる。久貝ではズとスの摩擦音に「ツ、ヅ」の破擦音も加えれば、摩擦性がなんらかの形で認識されていると見ることができよう。国仲については「ル」と、これを小さく書いたもの併せて 14 名に達している

る一方で、「ズ」は 3 名で、子音を意識した結果が明らかである。「久貝：カナマズル / 国仲：カナマル」のような書き分けも、そのひとつと見られる。これを 3 地点の相関関係で見てみると、久貝と国仲の対比を明確に捉えている生徒が多数を占めていることがわかる（次ページの表 28）。同じ語が連続することのないように配列しているので、両者を比較しながら聞いたわけではない。調査 1 でも用いた伊良部の音源と比べて、久貝、国仲のタイプは高校生にとっても比較的把握しやすいと言えるようで、両者の区別もほぼなされている。その一方で、やはり伊良部については表記に迷っている様子が見える。上述のように無回答が 2 例あるほか、「カナマ」のように 3 音節で終わっているものもあり、語末をどう書くべきか判断

表28 「頭」：語末に何が書かれているか

地点	久貝	国仲	伊良部
音形	k ^h anamazi	kanamal	k ^h anamaɪ
ズ	10	3	1
ス	1	—	—
ヅ	1	—	—
ツ	2	—	—
ス	—	—	1
ズル、ズイリ	2	—	—
ル	—	13	2
ル	—	1	1
工、エ	—	—	3
ウ	—	—	2
ア	—	—	1
なし	—	—	4
計	17	17	17

表29 「頭」：3 地点間の相関関係

久貝	国仲	伊良部		
-Z	-L	-I	4	12
-Z	-L	-L	3	
-Z	-L	-Z	1	
-Z	-L	-なし	3	
-Z	-L	無回答	1	
-ZL	-L	-I	2	
-ZL	-L	-なし	1	2
-Z	-Z	-Z	1	
-Z	-Z	無回答	1	
-Z	-Z	-I	1	3

(それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す。
Zは摩擦噪音、Lは成節的I、Iは母音)

がつかないまま終わった可能性が高い。

これを再び3地点の相関関係から観察してみる。久貝一国仲をZ/Lで区別した12名のうち、4名は伊良部に対して母音を、3名は「ル」を選んでいるが、残りの5名は1名がズのほかは回答が書かれていません。上述のように狩俣などに較べれば（記録によれば [kanamau ~ k^hanamaɪ] とされる。別に aha も併用される）、伊良部の発音は舌が歯茎にかなり近づいているようにも聞こえる。高校生の場合意味がわからないだけに、書き取るにも苦労したものと推測される。なお、意味についての回答はわずか2名からしか得られず、うち1名は国仲の回答のみ正解で、あとの2地点については意味を正しく答えることができなかった。

表30は、「稻光」の全表記である。語末部分に注目すると、久貝では1例の「ヅ」を除いて、すべて「ズ」となっている。それに対して保良ではズを選んだのは1名だけで、ルが11、「ズ・ヅ」

が2、「ウ」が2などのように、選択が分かれている。音声データによれば、久貝も保良もともに摩擦噪音の著しいタイプであるが、調査者の記録の違いにも表れているように、保良は摩擦の部分が弱く、久貝に較べて歯茎への接近が距離的にも時間的にも短いと推測される。高校生たちも久貝の明瞭な摩擦音には一様に「ズ」を選択しながら保良で判断が分かれるのは、こうした微妙な違いに反応した結果と見てよいのではないだろうか。そこでこのことに注目して語末部分をまとめてみる（表31）。大まかな分類を施して見ると、摩擦噪音の弱い保良に対しては母音を選んだのはわずかに2名で、子音と同じ選択をしているものが大勢を占めている。

表30 「稻光」：17名の全表記

	久貝	保良
音形	m:napskaz	nnapaskaɪ
1	ンナプカズ	ンナピカル
2	ンーナツカズ	ンナツカル
3	ンナプスカズ	ンナピカル
4	ンーナプスカズ	ンナップスカドゥ
5	ンーナプウカズ	ンア ピィカル
6	ンーナプスカズ	ナブスカル
7	ンナプスカズ	ンナピカル
8	ンナピカズ	ンナピカ
9	ンナプツカズ	ンナピカウ
10	ンーナスプカアズ	ンナクスカル
11	ンーナブツカアズ	ンナブカーズ
12	ンーナプウカズ	ンナアピカル
13	ンーナプスカズ	ンナップスカウ
14	ウンナツカズ	ウナピカル
15	ンナピカツ	ンナピカツ
16	ンナプクスカズ	ナブスカル
17	ンナッピカズ	ンナムピィカアル

表 31 「稻光」：語末部分 2 地点相関

久貝	保良		
Z	17	L	11
		Z	2
		D	1
		U	2
		なし	1

表 32 「稻光」「東」「頭」：久貝の *ki への反応

稻光	東	頭	
Z	Z	Z	10
Z	ZN	Z	2
Z	Z	ZL	2
Z	Z	C	2
Z	SN	Z	1

(それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す)

久貝の音源はこのほかに「東」も含まれているので、各生徒が同じ久貝の音声に対してどのように反応しているかまとめてみた（表 32）。「ズ・ヅ」などをまとめれば、3 地点に対して摩擦音を選んだ回答が 10 にのぼっており、どれにも摩擦音を選ばなかった回答は 1 例もない。久貝の摩擦噪音はかなり安定して聞き取られ、しかも調査者の記録と合致して独立した子音 [z] を含むものとして把握されているといふと推測できるのではないだろうか。

なおここでは宮古仮名の「ズ」が 2 例、宮古仮名を模したと思しき「グ」が 1 例で使われている。後者は通常「クス」と書かれるので、調査 1 のまとめでも述べたように、宮古仮名は若年層に認知されている訳ではないことを示していると見なすべきであろう。

3.2.2 「肝」「霧」「月」「息」：*ki に対応する部分への反応

表 33 「肝」：3 地点・17 名の全表記

地点	久貝	国仲	伊良部
回答者	k ^{s2} imu	tsimu	tsjmu
1	クスム	ツム	セム
2	ツヌ	ツム	スム
3	プスム	ツム	スム
4	プスム	ツン	セム
5	グズ	ツム	セム
6	ツクニ	ツン	セム
7	クウシニ	ツウム	スイム
8	ティニ	ツムウ	シイム
9	クスリ	ツエム	セム
10	クスヌツ	ツム	セム
11	クスヌ	ツム	シム
12	ケンミ	ツム	スイム
13	クスムツ	ツム	ツイム
14	ツニ	ツム	セム
15	クム	ツム	シム
16	クスミ	ツム	セヌ
17	クム	ツム	セム

無声子音の後に中舌母音が続く場合として、*ki が含まれるもの 4 語について見てみる。そのうち、3 地点から音源を選択した「肝」では、一見して久貝には「ク」の後に「ス、ス」などを書いた回答が多く、語頭にプを選んだものも含めれば、10 名は語頭の子音の後に何らかの摩擦噪音が続くことを意識したものと見られる（表 33）。本調査の記録では、久貝については中舌母音の前に無声と有声の摩擦噪音を重ねており、摩擦音の強さ、長さを表記しようとの意図かと思われるが、高校生も同様に強い摩擦音に反応したものだろう。伊良部も国仲もともに、調査者の記

録では破擦音の後に中舌母音が表記されている。両者は記録者が別で表記も異なっているが、音声データによると国仲のはっきりした破擦音に比べ、伊良部は破裂部分が少し弱い。加えて、[国仲では [tsi]mu と頭高になっているのに対し、伊良部では tsj[mu] のように尾高型となっている。高校生の回答では伊良部に対して、「サ、セ、シ」などのサ行子音が圧倒的で、破擦音は 1 例しか得られておらず、閉鎖部分の弱さだけでなく、アクセントの影響で第一音節が捉えにくかった可能性が高い。表 34 はこれらの相関関係をまとめたものである。

表 34 「肝」：3 地点相関

地点	久貝	国仲	伊良部	計
a	KS	C	S	7
b	KS	C	C	1
c	K	C	S	3
d	C	C	S	2
e	PS	C	S	2
f	CK	C	S	1
g	T	C	S	1
				17

(グズ、クウシもクスと同じく
KS タイプとして分類した)

表 35 「霧」：17名の全表記全表記

地点	久貝	保良
音形	ksü	k ^ə i:
1	クス	クス
2	クス	クス
3	ブス	クス
4	ブス	クフ
5	ブス	クスウ
6	ブス	クス
7	クス	クウス
8	クウス	クズツ
9	クス	クス
10	クス	クスウ
11	クス	クス
12	クスウ	クスウ
13	クス	クス
14	クス	クスウ
15	クス	クウ
16	ブス	クス
17	ブス	クス

表 36 「霧」 2 地点相関

地点	久貝	保良	計
a	KS	KS	7
b	KS	Ki	1
c	KS	KiS	1
d	PS	KS	4
e	PS	KZ	2
f	PS	KF	1
g	KiS	KZ	1
			17

(小文字の i は任意の母音)

「肝」と同じく語頭に *ki を含む「霧」は⁶、久貝と保良の 2 地点の音源を使用した。両地点ともに摩擦噪音が耳立つ発音であるが、本調査の記録者は久貝について子音 [s] を独立的に認める表記、一方の保良は摩擦噪音を伴う母音という形である。興味深いことに高校生も、久貝についてはほぼ全員が「クス」もしくはそれに準ずる選択をしており、語頭が「ブ」のものも含めれば全員が同じタイプとなる。カナ表記に統一したので、彼らが s の後の母音をどう認識したのかは不明であるが、保良の場合と比較すると摩擦音の強さに専ら注意が向いた可能性が高い。久貝では語末にわざわざ「ウ」を小さく表記したのが 1 例のみであるのに対し、保良では小さな「ウ」や「ツ」が増え、「ズウ」のような表記もある⁷。摩擦噪音を聞きながらも簡単に子音だけで終わっていないという印象を持ったのかもしれない。調査記録との関係から行っても、興味深い。

次に *ki が第二音節となる「月」「息」を見てみる。「息」については久貝と来間の 2 地点から音源を選択したが、「月」については久貝のみである。

「息」は、来間では 2 名のインフォーマントの音形が記録されているが、より閉鎖音の弱いほうを採用した（次ページ表 37）。この発音は高校生には閉鎖部分は聞き取られず、全ての回答で「ス」が選ばれている。

今回の調査で久貝の音源が多く含まれているのは、とくに摩擦噪音の聞き取られ方が関心の中心であったためである。そこで、これら 4 語の表記をまとめてみた（表 39）。久貝の強い摩擦噪音は「ス」や「ツ」などに反映されていると思われるが、「霧」「月」ではとくにそ

6 本調査でも伊良部で k^biri、上地で k^çiruri という音形が報告されているが、久貝、保良を含めたその他の地点では *kiri の後半部分を欠いたような対応であると見なした。

7 小さいウによる表記は、宮古では中舌母音に対して円唇母音とわかるように表記するためによく使われているのを見ることができる（例：がんずう、など）。中舌母音を伴う場合にはス、ズのようにウは表記されないようだ。

表 37 「息」：17 名の全表記

地点	久貝	来間
音形	ik'si	i'si
1	イクズ	イス
2	イツ	イス
3	イップウ	イス
4	イフ	イス
5	イク	イス
6	イプク	イス
7	イク	イス
8	イクウ	イス
9	イク	イス
10	イクウ	イス
11	イク	イス
12	イユク	インス
13	イクズ	イス
14	イク	イス
15	ユツウ	リス
16	イプウ	イス
17	イクウン	イス

表 38 「月」：全表記

地点	久貝
音形	tskssu
1	ツンクス
2	ツクス
3	ツクス
4	ツクスウ
5	ツチャスウ
6	ツクス
7	ツウクス
8	ツウクスウ
9	ツクス
10	ツクツクスウ
11	—
12	ツクスウ
13	ツクスオ
14	ツクス
15	ツウクスウ
16	ツツス
17	ツクス

表 39 久貝の *ki をどう表記したか（17 名の全表記）

	語頭		語末	
	肝	霧	月	息
1	クス	クス	クス	クズ
2	ツ	クス	クス	ツ
3	プス	プス	クス	ッブウ
4	プス	プス	クスウ	フ
5	グ	プス	スウ	ク
6	ック	プス	クス	ブク
7	クウ	クス	クス	ク
8	ティ	クウス	クスウ	クウ
9	クス	クス	クス	ク
10	クス	クス	クスウ	クウ
11	クス	クス	—	ク
12	ク	クスウ	クスウ	ユク
13	クス	クス	クスオ	クズ
14	ツ	クス	クス	ク
15	ク	クス	クスウ	ツウ
16	クス	プス	ツス	ブウ
17	ク	プス	クス	クウン

表 40 久貝の *ki 摩擦噪音の有無

	肝	霧	月	息
あり	13	17	16	6
なし	4	0	1	11

（ここでは破擦音も摩擦性を含むものと見なした）

れがはっきりしている。聞こえ方は語の中の位置やアクセントの位置などにも左右されているようで、これだけのサンプルから結論付けることはできないが、高校生の耳には独立した子音として聞こえている可能性が高い。調査者の記録との関係からも、もう少しこの点を追求できればと思う。

3.2.3 「人」「昼間」「稻光」：*hi に対応する部分への反応

次に、*hi に対応する部分について見てみる。「人」「昼間」については久貝、伊良部の 2 地点の音源を用いた（表 41）。本調査の記録では伊良部も久貝と同じ表記になっているが、音声データを比べると、久貝の摩擦噪音ははるかに鋭く聞こえる。聞き取りの結果は、久貝については「ピ、ブ」併せれば p- の後に摩擦噪音が続く発音がよく反映されており、それ以外のものは「ツ」が 1 例だけである。また後半部分は「トウ」「ト」が大勢を占めている。それに対し伊良部については語頭を「ツ」としたものが 7 名、「ピ、ブ」等を選んだものが 8 名、「ト」が 1 名と選択が分かれ、しかも後半部分についても「ト、トウ」併せて 10 名のほかに、「テ、タ」などもあって一定していない。ちなみに、この後半部分の表記を見ると、久貝については 17 人中 12 名、表記がばらけた伊良部でも 8 名が小さい「ウ」を最後に付しており、円唇母音

表 41 「人」：17 名の全表記

	久貝	伊良部
音形	pstu	pstu
1	ブストゥ	ブスト
2	ピツ	ピツ
3	ピストゥ	ピスタ
4	ブストゥ	ブストゥ
5	ピストゥ	ピトウ
6	ブスト	ツトウ
7	ブストゥ	トウク
8	ピストゥ	ツトウ
9	ブストゥ	ツテ
10	ピストゥ	ピストゥ
11	ピトウ	—
12	ブストゥ	ピュストゥ
13	ブスト	ブスト
14	ブストゥ	ツトウ
15	ピトウ	—
16	ピウス	ツタ
17	ツウトッ	ツトウ

表 42 「人」：語頭の対比

人	ピス	プス	ピツ	ツ	無回答
久貝	5	8	1	1	0
伊良部	2	4	1	6	2

表 43 久貝の *hi をどう表記したか (17名の全表記)

音形	語頭		語中		回答数
	人	昼間	老人	稻光	
pstu	psima	uipstu	m:napskaz		
1 プストウ	プスマ	ウミプトウス	ンナブカズ		
2 ピツ	プスマ	ウイピトウ	ンーナツカズ		
3 ピストウ	プスマ	ウリピスト	ンナブスカズ		
4 プストウ	プスマ	ウイッピストウ	ンーナブスカズ		
5 ピストウ	プスマ	ウイブストウ	ンーナブカズ		
6 プスト	プスマ	ウイブスト	ンーナブスカズ		
7 プストウ	プスマ	ウミブストウ	ンナブスカズ		
8 ピストウ	ピスマイ	ウイビストウ	ンナブカズ		
9 ブストウ	プスマ	ウイブスト	ンナブツカズ		
10 ピストウ	プスマ	ウイビストウ	ンーナブスカズ		
11 ピトウ	プスマ	ウミビトュ	ンーナブツカズ		
12 ブストウ	プスマ	ウイビストウ	ンーナブカズ		
13 ブスト	プスマ	ウミブスト	ンーナブスカズ		
14 ブストウ	プスマ	ウイブウト	ウンナツカズ		
15 ピトウ	プスマ	ウイビトウ	ンナブカツ		
16 ピウス	プスマ	ウグイクス	ンナブクスカズ		
17 ツウトツ	ピスマ	ウウイップスト	ンナッピカズ		

表 44 久貝の *hi : 摩擦噪音に対応した部分の有無

	人	昼間	老人	稻光	回答数
a	○	○	○	○	7
b	○	○	○	×	5
c	×	○	×	○	2
d	○	○	×	×	1
e	×	○	○	×	1
f	×	○	×	×	1

表 45 「みんな」(17名の全表記)

地点	久貝	伊良部	宮国
	みんな	みんな	みんなで
音形	m:na	m:na	m [?] nači
1	ウムンナ	ンナ	ブンーナシ
2	ンーナ	ンナ	ビーンナシ
3	ンッナ	ンナ	ピッナシ
4	ンーナ	ンナ	インナシイ
5	ンーナ	ンーナ	ンーナシ
6	ンーナ	ンナ	ンーナシ
7	ンーナ	ンナ	ピンナシ
8	ンーナ	ンナ	ンナシ
9	ンーナ	ンナ	ンナシ
10	ンーナッ	ンナア	ンーナシ
11	ンーナ	ンナ	ンーナシイ
12	ンーナッ	ンナア	ンーナシユ
13	ンーナ	ンナ	ンーナシ
14	ンーナ	ンナ	ンーナシ
15	ンーナ	ンナ	ンーナシ
16	ンナア	ンナ	インナシ
17	ンーナシ	ンナ	ンーナシ

の u を強く意識した結果と推測される。

ほかに *hi に対応する部分を含むものとしては、「昼間」「老人」「稻光」がある。摩擦噪音がはっきりしている久貝の音源に対する表記をまとめると表 43 のようになる。4 地点のすべてについて摩擦噪音に対応したと思われる部分のある表記（表 44 の a、7 名）が半数近くを占めている。c 以下のケースは個人差によるものと推測されるが、b の「稻光」だけに摩擦噪音対応分を欠くタイプが 5 例になっているのは、何らかの音声環境の違いによるものかもしれない。

3.2.4 子音の聞き取り

前項の「稻光」では、調査記録にある語頭の成節的 m がすべて「ン」で表記されている。表 45 は、「みんな」（一部「みんなで」）について選択した 3 地点についてまとめたものである。あえて「ム」を選んだのは久貝の「みんな」についての 1 回答だけのようで、伊良部・久貝の 2 地点についてはすべて「ン」となっている。宮国は間に声門閉鎖による区切りの聞こえるケースである。それ自体に反応したと見ることは難しいが、伊良部・久貝に較べると前半部分にいろいろな工夫が見られる。語頭が p- のものが 4 回答あるのも、声門閉鎖による区切りが次に来るために唇音 m の調音の際に力が加わり、それが無声の閉鎖音のように聞こえたのかもしれない。「ピッナシ」などはその予測を裏付ける回答のように見えなくもない。宮古島地域の若年層は仮にこれらの m を聞き分けていたとしても、表記の方法としては標準語と同じに「ン」しか書きようがないと考えているかもしれません、音の実態をどう捉えているかはわ

表 46 「海」：全表記

	保良
音形	im
1	イン
2	イン
3	イン
4	イヌ
5	イム
6	イン
7	イン
8	イン
9	イン
10	イツ
11	イン
12	ンユ
13	イム
14	イン
15	ビュ
16	イン
17	イン

表 47 「サトウキビ」 3 地点 17 名の全表記

	久貝	保良	伊良部
音形	b <u>u</u> :g̚i	b <u>u</u> :g̚i ~ b <u>u</u> :d̚i	b <u>u</u> :d̚i
1	ウーズ	ブーグ	ブーズ
2	ウージ	ブーク	ブーズ
3	ウォーアイズン	ドゥーク	ブーッグ
4	ウージン	ドゥーグ	ブーブウ
5	ウーズ	ワークヌ	ヴーズウ
6	ウイズン	ドーパーク	ブーグズ
7	ウーヴィズ	ドゥーグ	ブゥーヴ
8	ヴーズ	ドゥーグウツ	ブゥーズ
9	ウーヴィズ	ドゥーグ	ブーグズ
10	ボーアイズ	ブワーグ	ブウグズ
11	ウーヴィズ	ドゥーグ	ブーグ
12	ウウズ	ブーンクウ	ブーングズウ
13	ウーズ	ブーグズ	ブーグズ
14	ウーズ	ドゥーグ	ブーズ
15	—	ドゥムク	ドゥーワ
16	ウゲイズウ	ドゥーグ	ウーズ
17	ウウズ	ブーグ	ブーグズ

からない。この問題については「海」（保良の音源のみ使用）でもほぼ同じ結果となった。

本報告では以上、*ri, *ki, *hi に対応すると思われる音声を含むもの、及び成節的 m についての結果を紹介した。語の聞き取りはこのほか有声音 g- に中舌母音が続く場合や、*i に対応すると思われるものなどいくつかのデータが得られているが、ここで報告した *ki, *hi の場合に比べると回答がかなりばらばらで、高校生にとって聞き取りがより難しいと思われる結果となった。そもそも語頭の子音がばらばらで語の全体像がかなり離れてしまったり、また久貝のように摩擦噪音がはっきりしている発音でも子音の前に「イ」が挿入されるなど、無声子音の場合には見られなかった傾向が顕著となっている。

なお、語項目の意味理解度は総体的に非常に低く、意味についての言及があったのは「頭」(正解 2 名)「サトウキビ」(同 2 名)「お前」(同 4 名)「人(老人も含め)」(同 5 名)「みんな、みんなで」(同 4 名)のみで、このうち複数地点からの音源がある場合にすべてで正解だったのは「頭」についての 1 名だけであった。

3.2.5 文項目の聞き取り結果

調査 1 の報告で、聞き取って書くのが困難と思われる文項目の回答が、少なくとも宮古島市の高校生については予想外に健闘していることについて述べたが、調査 2 でも文項目の聞き取りは予想より原音に近く書かれていた。とくに、正解であったかどうかは別にして、意味に関する言及が語項目より多いことが目をひく。文項目を選ぶ際には「高校生」「制服」「校長先生」「茶」など、若年層でもすぐに理解できそうな単語の入っているものを意図的に取り上げ、馴染みのある単語が出てくることで意味記述が増えれば、逆に述語部分の理解度がどの程度であるかを見る能够であるのではないかと考えた。ここでは意味について言及の多かった項目のうちから 2 項目について紹介する。

表48 「高校生は制服を着る」(保良) 17名の全表記

音形	意味は?	「着る」部分
1 コーコセイーヤ セイフクヲド プスー	高校生は 制服を 着けている	プスー
2 コウコウセイや セイフクヲトオ ツー	高校生は 制服を 着ている	ツー
3 コウコウセイや セイフクトウ プスー	—	プスー
4 コウコウセイや セイフクオトウ クスゥー	—	クスゥー
5 コウコウセイや セイフクヲドウ キヌウ	高校生は 制服を 着ている	キヌウー
6 コーコーセイや シェイフクウナ ツー	高校生は 制服を 着れ	ツー
7 コーコーセイ ヤ セーフクヲトツー ツツ	高校生は 制服を 着ける	ツツ
8 コーコーセイヤー セイフクヲトツー ツユー	高校生は 制服を 着る	ツユー
9 コーコーセーヤ セイフクードウプスー	—	プスー
10 —	—	—
11 コウコウセイヤー セイフクヲドゥー、クスー	高校生は 制服を 着るー	クスー
12 ホウホウセイやアー シェイフクウトウ クスゥー	高校生は 制服を きる	クスゥー
13 コウコウセイや セイフクヲドウ クスー	—	クスー
14 コウコウセイや セイフクヲトウ ピスゥー	高校生が 制服を 着る	ピスゥー
15 コウコウセイやセイフクヲクスー	高校生は 制服を 着る	クスー
16 コーコーセイヤー セイフク トゥオ スー	—	スー
17 コーコーセイヤセイフクトゥップスウ	—	プスウ

表49 「茶はさっき飲んだ」(砂川)(保良) 17名の全表記

音形	意味は?	「飲んだ」部分
1 チャーヤ ンナマズヌンタン	—	ヌンタン
2 チャーヤ、ンナマド ノンター	あの人は今まで飲んでた	ノンター
3 チャーヤ ナマズヌンタル	—	ヌンタル
4 チャーヤンナマドウ ヌンタ	—	ヌンタ
5 チャーヤ イツフトウ アスピタア*	—	アスピタア*
6 キャーヤ ナマデ ヌンタル	茶が今までぬるいよ	ヌンタル
7 チャーヤ ンナマドウ ヌンタウ	—	ヌンタウ
8 チャー ヤンナンナマドウ ヌンタウ	お茶を今まで飲んでいた	ヌンタウ
9 チャーヤ ンナマドウ ヌントウン	—	ヌントウン
10 —	あんたなんか今まで酒飲んでたな?	—
11 チャーヤ、ンナマドウ ヌンタウ	今	ヌンタウ
12 チャーアアヤ ナマド ヌウンタウン	—	ヌウンタウン
13 チャーヤ ンナマドウ ヌンタヴ	お茶を 今まで のんでいた	ヌンタヴ
14 チャーヤ ンナマドウ ヌーター	茶を今まで飲んでた	ヌーター
15 チャーヤンナマドウヌンタ	お茶は今まで飲んでいた	ヌンタ
16 チャーヤ ナマズ ヌンタン	—	ヌンタン
17 チャーヤナマドウヌンタウ	—	ヌンタウ

*他の項目と混同した可能性があるがこのまま示す

上のように、述語部分の音形の再現となるとかなりばらばらではあるものの、「制服一着る」「茶一飲む」というような連想によって、音形はともかく意味内容を理解しようという意欲が強く働くのではないかと想像される。そして同様の行動は、少なくとも宮古島地域の若年層の場合、まだ方言を活発に活用している老年層との接触の中で自然に行われていることなのではないだろうか。仮に「着る」「飲んだ」の部分を語として提示された場合には、他の語項目同様、意味の理解度が低くなったかもしれない。述語部分だけでなく、助詞や「今」のような副詞も含めて文意の大凡が把握されているが、こうした要素も老年層との接触で出現頻度の高いものであると推測される。

4. おわりに

宮古島地域は南西諸島の中でも方言がよく保存されているとされる。沖縄県の中で特異な方言というイメージも定着しているようだ。宮古島の若年層自身も、地域の方言が独特であるという認識を持っていることは、これまでのわれわれの調査からも明らかになっている。しかし今回の結果から見る限り、方言音声の継承には多くの課題がありそうである。その一方で、個々の音声に対する認識が不十分でも、文として発信されれば何らかのヒントがその中にあり、状況などと併せてなんなく意味がわかるという感覚は、恐らく高校生たちが日常祖父母などの接触の際の体験によるものであろう。

このように、方言の継承を考える上で若年層と老年層の密接な接触は重要なポイントと思われる。表 50 は 2011 年の高校調査から、祖父母との同居についてきいた結果である。宮古島と伊良部島の間の地域的な差は大きいが、平均すれば 3 割の同居率となり、まだまだ接触の機会は少なくないと思われる。高校生によれば、祖父母の世代はまだ方言をかなり活用しているが、父母の世代になると標準語もしくは中間方言的な形の活用が増える。それでも父母らは祖父母らの方言を理解し、使うこともできるが、子供たちと話すときには殆ど方言を使用しないという。宮古群島でも核家族化が進行し、とくに平良のような市街地ではマンション等の共同住宅も増えて家族形態が急激に変化している。「なんとなくわかる」感覚のあるうちに方言音声に対する関心が育てば、方言の継承に期待が持てるのではないだろうか。そのためにも、一般的な使用に耐える表記方法の確立が待たれる。

今回の調査では本調査の成果により老年層の生の音声データの活用を試みた。従って録音状態がベストではないが、逆に言えば若年層が日常接する環境に近い。こうした中で、音声によっては地域的な変種もおおよそは聞き分けられており、また彼らなりの工夫も見えたことから、方言への関心そのものは衰えておらず、方策によっては継承の可能性もまだまだ小さくないと考える。

表 50 祖父母との同居について（2011 年 11 月調査より、計 130 名、父方 / 母方は区別せず）

高校	同居していない	近くに住んでいる	同居している	過去に同居していた	無回答など
A (宮古) 高校	71.43%	1.79%	16.07%	3.57%	7.14%
B (伊良部) 高校	46.67%	3.33%	46.67%	3.33%	0.00%
平均	59.05%	2.56%	31.37%	3.45%	4.65%

参考文献

- 青井隼人 (2012) 「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』 No.8, 99-113
- 小川晋史 (2011) 「これから琉球語に必要な表記法はどのようなものか」『日本語の研究』 第 7 卷 4 号, 99-111

参考：分布図（本調査「音韻A」の結果より）細かい音声的特徴をまとめ、アルファベットの大文字で代表して示す

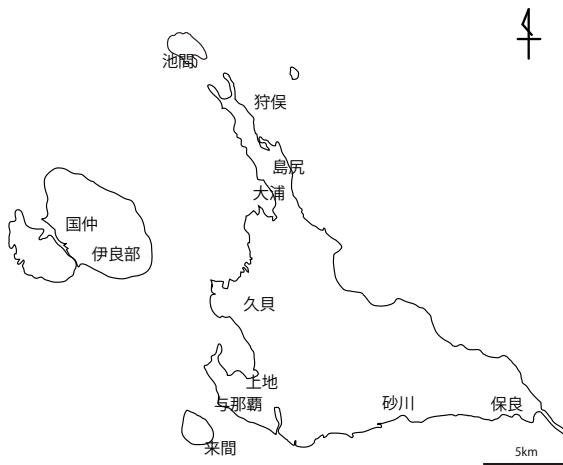


図1 音韻調査地点

池間	上地	国仲
狩俣	与那覇	伊良部
島尻	来間	
大浦	砂川	
久貝	保良	



図2 「頭」

!	摩擦噪音あり	KANAMAZ
●	摩擦噪音なし	KANAMAI
↓	成節的子音	KANAMAL
	別語形	
N	データなし	

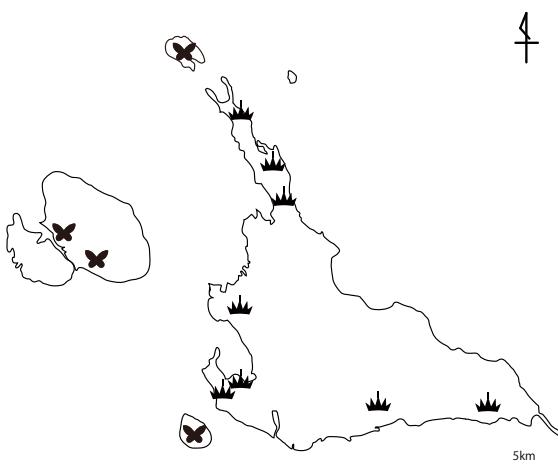


図3 「心臓」

!	摩擦噪音	KSIMU
蝶	破擦音	CIMU

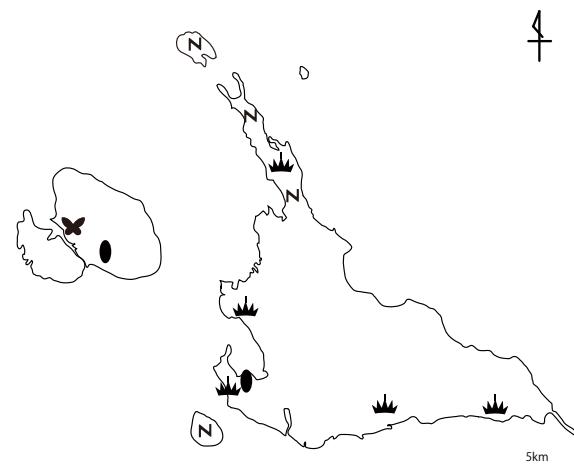


図4 「霧」

!	摩擦噪音あり	KSI:
蝶	摩擦噪音なし	KIRI
●	破擦音	CI:
N	データなし	

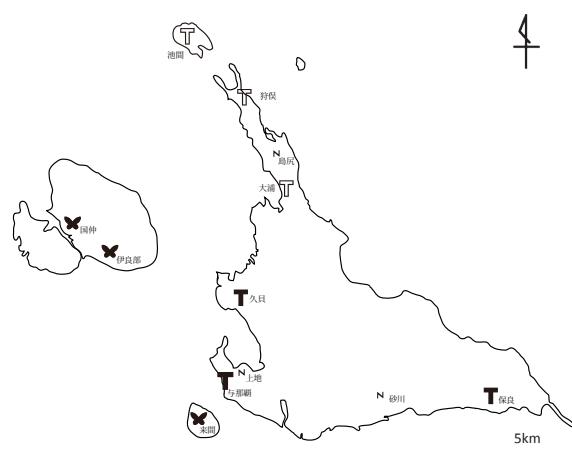


図5 「息」

T	摩擦噪音あり	IKSI
T	摩擦噪音なし	IKI
蝶	破擦音	ICI
N	データなし	

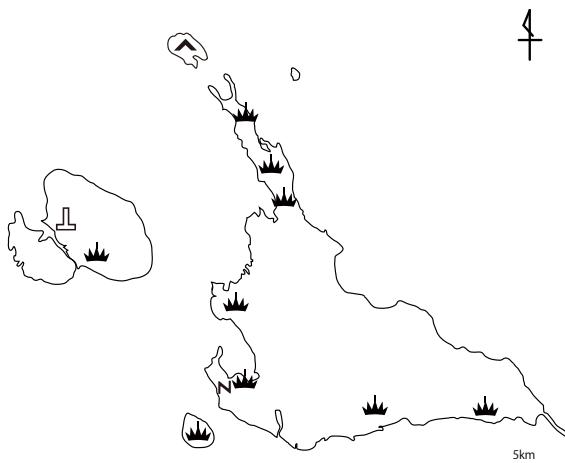


図6 「昼間」

王冠	摩擦噪音あり	PSIMA
○	摩擦噪音なし	PI:MA
下線	成節的子音	PILMA
△	HI:MA	
N	データなし	

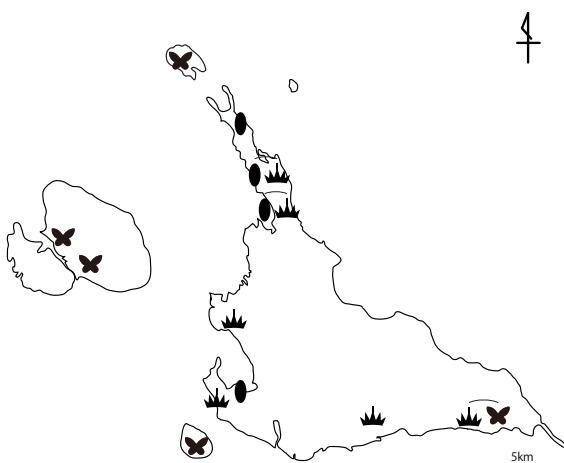


図7 「サトウキビ」

王冠	摩擦噪音あり	BU:GZI
○	摩擦噪音なし	BU:GI
蝶	破擦音	BU:DZI

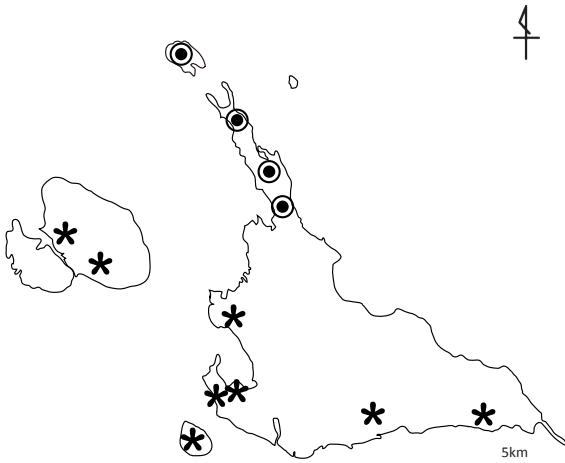


図8 「海」

*	IM
○	IN